ゴットフリートの『トリスタン』における策謀の力学(2)
―マルケ王の人物像と「宮廷」の意味―

田　中　一　嘉

序

ゴットフリート･フォン･シュトラースブルクの『トリスタン』[1] において、主人公トリスタンは、数々の陰謀に翻弄されつつも、宮廷人としての資質と類稀なる知性を頼りに数々の危難を切り抜けていく。しかし、彼の知性をもってしても媚薬の魔力からは逃れられない。むしろ、図らずも囚われたイゾルデとの恋愛関係を継続させることに全精力を注ぎこみ、その果てに愛のうちに死を遂げる。

媚薬エピソード以前（物語前半部）において、トリスタンが陰謀と対決し、宮廷人としてのアイデンティティーを確立していく過程については、拙稿「ゴットフリートの『トリスタン』における策謀の力学（1)」[2] で詳しく述べたところである。本稿ではそこからさらに進んで物語の後半部、すなわち媚薬を飲み、イゾルデとの道ならぬ恋愛を完遂していく過程において、前半部分と同様、恋人たちに襲い掛かる策略を中心として考察を進めていく。ただし、本稿ではトリスタンとイゾルデに焦点を当てるのではなく、むしろイゾルデの夫マルケ王個人とマルケ王の宮廷の在り様を中心に扱っている。つまり、ゴットフリートが「清い憧れ（*rine sene*)」(v. 127）と言って憚らないトリスタンのイゾルデの恋愛[3] と、恋人たちと対決するマルケ王およびその宮廷との関連性を明らかにすることが本稿の目的である。

そこで、続く第 1 節では、前掲の拙稿を踏まえながら、物語前半部におけるトリスタンとマルケ王の宮廷との関係性について、本稿と接続する重要な点を整理していくこととし、第 2 節以降では後半部における恋人たちに張り巡らされた策謀の分析、そしてマルケ王の人物像と彼の宮廷の特質に迫っていく。

1. 前半部におけるトリスタンとマルケ王

1-1. トリスタンのアイデンティティー再構築

養父ルーアルから宮廷人としての英才教育を施された少年トリスタンは、彼の優れた語学力と音

楽の才能に目を付けた（商品としての価値を見出した）商人たちに誘拐され、故郷の地から引き離されてしまう。海上で嵐に見舞われ流れ着いたコーンウォールの地で、図らずも叔父マルケ王の宮廷に身を寄せたトリスタンは、持ち前の「用心深さと慎重さ（*vil wol bedâht und sinnesam*）」（vv. 2692f.）、そして（誘拐される原因ともなった）洗練された宮廷風の振る舞いや、狩猟に関する技術、語学と音楽の才能によって王やその廷臣たちの寵愛を得ることに成功する。

その後、養父ルーアルとの再会によって、トリスタンの真の出自が明らかになり、マルケ王が実の母の兄にあたることが確認される。トリスタンは、マルケ王のもとで刀礼の儀を済ませ、「騎士としての人生」がここからスタートする。そして一旦生まれ故郷パルメニーエへ戻り、実父リヴァリーンを殺した仇敵モルガーン大公の軍勢を倒し、復讐の義務を履行する。と同時にパルメニーエをルーアルの世襲領地とすることで、養父（今ではトリスタンの家臣）に対する関係も再構築する。パルメニーエでの役目を終えたトリスタンは、ここで再び「もう一人の父」マルケ王の許に赴き、彼に一騎士として仕えることを決心する（vv. 5684f.）[4]。

トリスタンのアイデンティティーの再構築の過程において、当初マルケ王はトリスタンを「友（*vriunt*）」（v. 3352 以降）と呼び、宮廷の構成員たちも「愛すべき廷臣（*ein lieber hoveman*）」（v. 3487）として受け入れていた。それはトリスタンが「正統な世継ぎ」として認められた時も同様であった。しかし、トリスタンの行状が宮廷全体を代表するようになると状況は一変する。

それがアイルランド大公モーロルトとの一騎打ちの場面である。アイルランドとの間に結ばれた屈辱的な協定を破棄するにはモーロルトとの一騎打ちか、国を挙げての戦争しか方法がなかった。マルケ王をはじめ、廷臣の誰一人としてこの協定を破棄しようと立ち上がるものはいなかった。この場面においてマルケ王は「行為する人物」ではなく[5]、「宮廷の人々」という集団的意識のうちに溶けこんでいる。そしてここでは「廷臣たち＝集団意識＝政治的判断」という構図が見られ、この構図は後半部分においても踏襲されている。

これに対してトリスタンは宮廷の代表者として決闘に臨み、勝利する。しかも彼は、決闘の際に追った瀕死の重傷を、敵方であるアイルランド王妃イゾルデに治療してもらい、見事コーンウォールに生還するという離れ業まで達成する。この事績によってトリスタンの名声は確固たるものとなるが、彼の名誉を承認したのはまさにマルケ王の宮廷である[6]。

しかし、トリスタンにとってもはや唯一の帰属先であり、宮廷人としての名誉の基盤であるマルケ王の宮廷は、同時に自身の命を危険にさらす場ともなる。というのも、トリスタンが称賛されるべき人物であることは疑いえないが、しかしその成し遂げた事績はまさに「驚異（*wunder*）」（v. 8247）であり、廷臣たちにとっては自らの命を脅かしかねない脅威でもあったからである[7]。その意味においてトリスタンは、その偉業に反して、マルケ王の宮廷にとっては「否定的な英雄」[8]であると言えるかもしれない。だからこそ廷臣たちは、トリスタンを「世継ぎとして」宮廷の中心に据える可能性を残しておくことよりも、積極的にマルケ王に結婚を勧め、直系の相続人をもうけるというより現実的な要求をマルケ王に突きつけるのであるが、この要求によって物語はようやくト

リスタンとイゾルデの恋物語へと舵を切ることになる。

1-2. トリスタンの知性

ところで、前半部においてトリスタンが至る所で発揮する知性・知略が最大限の効果を生み出しているのは、それがたとえ偽りを含んでいたにせよ、まさに生命の危機に直面してのことである。そしてこの生命の危機は、誘拐、屈辱的外交、宮廷の陰謀といった、いわば「外的要因」によってもたらされたものでもある。

後半部では、イゾルデとの恋が「命にかかわる事柄」であることは、トリスタン自身の告白のうちに見られる（vv.12494-12502）[9]。「二者合一」のモチーフの下では、片方が死んでは残された片方も生きてはいけない[10]。また、この恋心自体が「媚薬」によってもたらされたものであることを鑑みれば、「恋心＝媚薬＝外圧」という構造も成り立つ[11]。その意味においては、後半部における知性もまた、生命の危機から脱するためのものと言えなくもない。ただし、注意しなければならないのは、後半部で働く知性は、死をもたらす恋心から逃れるためではなく、もっぱらその恋を秘匿し継続させるために用いられていることである。さらに注意しなければならないのは、トリスタンが知性を働かせる場面は限定的であり、マルケ王たちが張り巡らす策略に対する対抗策を積極的に案出するのはむしろブランゲーネとイゾルデ、つまり女性側なのである。それ故に後半部における知性の主体は、幾分広くとらえられねばなるまい。

トリスタン個人に限ってみれば、対外的に効果が目に見える策略という点では前半部分ほどのインパクトはないにしても、内面における思考という側面においては、目まぐるしく展開していく。トリスタンはイゾルデへの恋心に狂わされる一方で、その恋心がマルケ王に対する「信義」に反していること、そしてマルケ王の宮廷における「名誉」に反していることを強烈に自覚している（vv. 11741-88）。しかし、トリスタンはこの純粋な恋を ― この恋が純粋であるが故に― どれほど自問自答しようとも手放すことができないのである。

同様のことは「白い手のイゾルデ」のエピソードでも見られる。トリスタンは「金髪のイゾルデ」への恋心のために、「白い手のイゾルデ」との距離を縮めていく（vv. 18956-19087）。ここでトリスタンが働かせた（知性というよりもむしろ）思考は、自己欺瞞と言ってもよいほどのものであり、トリスタンの「嘘偽り（*trügeheite*）」（v. 19403）の犠牲となった白い手のイゾルデはまさに悲劇的人物と言えよう。そして彼女の立場からすれば、結婚という慣習を無視するという意味において、トリスタンはやはり「否定的英雄」に違いない。ただし、ゴットフリートの『トリスタン』はまさにこの場面（v. 19548 まで）で未完に終わっており、トリスタンが最終的に結婚を決意する場面、そして有名な「白い帆と黒い帆のエピソード」も描かれていないことから、詩人がトリスタンの白い手のイゾルデに対する振る舞いをどのように判断し描き出そうとしたかについては想像の域を出ない[12]。

未完に終わっている「白い手のイゾルデ」のエピソードは、トリスタン・ミンネの解釈に大きな

意味を持っているが、彼らの恋を読み解くには、もうひとりの当事者であるマルケ王の人物像の解明が欠かせない。というのも、トリスタンとイゾルデの恋と、マルケ王のイゾルデに向けられた愛情には、明確な「対照性」が示されているからである。

1-3. 前半部におけるマルケ王の人物像

マルケ王の人物像について考察する際、実はトリスタンほど一貫した人物像を描くことが困難であるという事態に直面する。これは先行研究においても両極端なマルケ像が提示されていることからも窺える。例えば、H. de Boor はマルケ王を「規律正しく飼いならされた宮廷的で人間的な生の形式の典型」、「宮廷的な意味において完璧な王であり、非の打ちどころのない宮廷女性のパートナーとして十分に値する」としている[13]。これに対して G. Holland は、マルケ王が個人的に対処するべき問題でさえ、廷臣たちの助けを借りるような、いわば受動的な人物に過ぎないと見做している[14]。また、I. Karg はマルケ王をアーサー王との比較において否定的に扱っている[15]。さらに A. Classen は、マルケ王の「マリオネット」的特徴と、彼本来の個性（感情または感覚）は必ずしも一致しないという視点に立ち、行為と感情の不一致がマルケ王の人格を分裂しているように見せているがゆえに彼を悲劇的人物と見做している[16]。積極的にせよ消極的にせよ、これらの解釈はいずれも一貫した人物像を提示しようとしているが、そもそもこのような両極端な解釈が生ずる原因はどこにあるのかを把握する必要があろう。

そこでまず、ここでは前半部におけるマルケ王の人物像を整理していく。彼と彼の宮廷は、トリスタンが生まれる以前からすでにコーンウォールとイングランドを支配し、その名声は世間に遍く知れ渡っている（vv. 420-26）。それ故に小国パルメニーエの領主リヴァリーンは彼の宮廷へ参内することを望んだのである。しかし、マルケ王は王としての名声は揺るぎなくとも、行為の上では強力なリーダーシップを持った活動的な人物としては描かれていない。というのも、リヴァリーンがマルケ王の妹ブランシェフルールと出奔した際、（この一件は明らかにマルケ王の宮廷にとって不名誉な出来事であるにもかかわらず[17]）政治的にも個人的にも何ら手だてを打つことなく、そのまま舞台の背後へと退いているからである[18]。同様のことは前述のモーロルト・エピソードにおいても確認される。

ただし、現状を打破しようとする「勇気」や「行動力」の欠如は、そのままマルケ王の人物像を否定的に扱う根拠とはならない。マルケ王には（トリスタンのような）強烈な個性が見当たらない分だけ、廷臣たちとの折り合いが良かった、統治者としてはバランスが取れている、と考えることもできるからである。事実、この時点ではまだマルケ王と廷臣たちとの間には、トリスタンと廷臣たちとの関係に見られるような不協和音は見られない。

この不協和音を生じさせる要因が登場人物の強烈な個性 ― トリスタン場合、勇敢さや知性 ― であるとするならば、マルケ王には廷臣たちとの関係、宮廷との間に不協和音生じさせる要素がひとつだけある。それはトリスタンに対する「愛情への執着」である。マルケ王は世継ぎとして特別の

愛着を持ってトリスタンに接するが、それは「自らの結婚を放棄する」ほどのものだった（vv. 5159ff.）[19]。マルケ王のトリスタンに対する愛情は、父性愛的な次元を超え同性愛的な色彩を感じさせなくもない[20]。少なくともこの特別扱いが、トリスタンに対する廷臣たちの風当たりを強めただけでなく、マルケ王自身もまたそれによって廷臣たちとの関係を拗らせていく。このような王と宮廷との関係の不協和音が、同性愛という否定性ゆえに引き起こされていると考えられなくもない。もちろん、ゴットフリートは同性愛については何一つ語っていないが、マルケ王のトリスタンの寵愛ぶりはやはり度を越したものであると言えよう。

それだからこそ王と宮廷の不協和音は「王妃選び」という形で顕在化する。マルケ王は廷臣たちの執拗な要求に対して、実現不可能と思われる（少なくともマルケ王はそう考えていた）提案をする。それは仇敵であるアイルランド宮廷の王女イゾルデとしか結婚しない、というものであった。結局、イゾルデをめぐる求婚の旅は（マルケの意に反して）トリスタンが使者に立たされることになり、それだけでなく廷臣たちをも巻き込んだ一大事業へと発展していった。この求婚の旅が失敗すればマルケ王とその宮廷は世継ぎとその他多くの家臣を失うことになる、という危機をマルケ王自らで招いているのである。

このような盲目的ともいえる愛情への執着が、マルケ王が自身の宮廷を混乱に陥らせる最大にして唯一の要素であり、この性格的特徴は後半部にも受け継がれる。ただし、マルケ王の盲目的な愛情は、対象を変えて更新されることになる。この対象の変更が、彼と彼の宮廷との間にさらなる不協和音を生じさせることになる。

トリスタンがイゾルデをマルケ王の宮廷に連れてきたことによって、マルケ王はトリスタンしか愛さない（女性と結婚することはない）という自らに立てた誓約を、自ら出した条件（イゾルデとしか結婚しない）によって破棄しなければならなくなった。これは一種の自己矛盾の状態であると言えよう。しかし、実際にはマルケ王の内面において何らの葛藤も生じず、愛する対象の移行は物語の展開に従って自然と行われる。イゾルデがコーンウォールに到着する際、マルケ王は彼女を「何物にも勝るもののように、心から迎え入れた」（vv. 12541ff.）のである[21]。もちろんマルケ王は、「もし彼女〔イゾルデ〕に世継ぎが生まれなかったとしたら、トリスタンが世継ぎとなる」（vv. 12573f.）という条件を付けたことからも、トリスタンに対する「甥としての」愛情は変わらず持ち続けていると言えるが、これはあくまで「肉親への愛情」であり、性愛的な意味においては（もし仮に同性愛的な感情をトリスタンに抱いていたにせよ）今やイゾルデがその対象であり、マルケ王においては「肉親への愛情」と「性愛」が並存しているとはいえ、「性愛」が第一の座を占めているのである。イゾルデとの結婚を経たことによって世継ぎ問題は一応の解決を見たことで、廷臣たちの嫉妬心も和らぎ、これ以降は問題とならなくなる。

2. 後半部におけるマルケ王の人物像

2-1. ガンディーン・エピソード

トリスタンとイゾルデの恋仲に対する最初の「横やり」は、意外にもマルケ王の宮廷の外部、しかしイゾルデのかつての帰属先であったアイルランドの地からやってくる。その名はガンディーン。アイルランド名門の貴族で、イゾルデに幾度か奉仕したことがあり、彼女を求めてはるばるやって来たのであった。

マルケ王は、ガンディーンに携えていた楽器ロッテの演奏を所望し、ガンディーンはそれに対価を求める。マルケ王はこのような場面の通例となっているように「私の所有するもので何がしかをお望みならば」、「あなたのお望みのものは、何でも差し上げよう」（vv. 13193ff.）と返答するが[22]、「この詐欺師（*der trügeneare*）」（v.13202）は言葉尻を捕え、報酬として王妃イゾルデを要求する。マルケ王は狼狽してこの要求を拒むが、ガンディーンは、マルケ王が前言を撤回するようなら「もはや一国の王に値せず」（vv. 13226f.）と蔑み、それでも拒むようなら果し合いで勝利せよと迫る。ガンディーンの出した果し合いの条件は、マルケ本人でも他の誰でも構わない、というものだった：

> 王はあたりを見回した、誰か彼〔ガンディーン〕に立ち向かうものはいないかと（中略）そしてまたマルケ王自身もイゾルデのために戦おうとは思わなかった。（vv. 13243-53）

こうして、廷臣たちはもとより当のマルケ王本人ですら何ら抵抗できずに王妃を連れらされるという屈辱的状況に甘んじている。これはモーロルト・エピソードで見た構図とまったく同じである[23]。

トリスタンはちょうどそのとき狩りに出かけ不在であった。事の次第を知ったトリスタンは竪琴を持って二人を追いかける。海岸で風を待っている一向に追いついたトリスタンは、ガンディーンと同じ方法でイゾルデを奪回する（vv. 13275-422）。無事イゾルデをマルケ王の許に返したトリスタンは彼に対して叱責の声をあげる：

> 竪琴やロッテの演奏のためにお妃をこうもたやすく手放してしまうなど、余りに無思慮ですぞ。はや世間が（*diu werlt*）嘲笑したとしても無理はないことですぞ。
>
> （vv. 13443ff.）※傍点筆者加筆

このガンディーン・エピソードは、トリスタンとイゾルデの恋に疑惑がかけられる前のものではあるが、トリスタン ― イゾルデ ― マルケ、この三角関係におけるマルケ王の立ち位置を定める準備段階となっている。ここでマルケ王はイゾルデを愛するにふさわしくない（資格のない）人物として非難されている。しかも、それは「世間があざ笑う」ような醜態をさらした人物としてである。

王妃を守れない王は、王者としての資質も問われかねない。このような人格的な危うさを伴いつつ、マルケ王は妻の不貞という疑惑の渦へと巻き込まれていく。

2-2. マリョドー、そして宮廷規模の疑いへ

ガンディーンの略奪を阻止したトリスタンであったが、今度はマルケ王の宮廷の内部で二人の恋を脅かす状況が生じる。この脅威は、ガンディーン同様、個人の思惑によって引き起こされる。その主体となるのが、マルケ王の第一の内膳頭マリョドーである。偶然が重なって彼はトリスタンとイゾルデの密会を目撃してしまう。ここで事態を悪い方へ向かわせたのは、マリョドー自身もまた密かにイゾルデに懸想していたことであり、それがためにトリスタンとイゾルデに対する好意的な感情は一転、憎しみへと転倒することになる（vv. 13596-612）。しかし、マリョドーはトリスタンの力（復讐）を恐れ[24]、事の次第を暴露することを躊躇い、「王の結婚生活と名誉を著しく脅かす」（vv. 13647f.）ようなうわさが宮廷内でもちあがったというベールをかけるにとどまった。

マリョドーの注進は「単純愚直にしてお人好し、疑うことを知らないマルケ王」（vv.13657f.）を大きく揺さぶる。マルケ王はイゾルデに何かよからぬ疑いをかける気にははなれないにもかかわらず、何かしらの証拠を見つけようと常に注意を払うようになる（vv. 13655-65）。マルケ王は、決断力のなさ故に、結局この疑惑を一人で解決することができず、その進捗を（実はもうひとりの恋敵でもある）マリョドーに相談することになる。このようなマルケ王の心情と行為の揺らぎは、この後小人メロートが計略に加担することでさらに大きくなっていく。

トリスタンとイゾルデの恋と、彼ら恋人たちに対する計略は、この時点ではまだ、マリョドー、メロート、マルケ三者間での（限定的な）秘密に留まっているが、私秘的なレベルでのこの策略は結局のところ大局的には公的な（宮廷全体の）名誉に関わることになる[25]。この点についてここで確認しておかねばならないのは、トリスタンとイゾルデの恋仲を「公に」暴くためには、目撃者の「証言」だけでは不十分であるということである。マリョドーは逢引の現場をはっきりと目撃している。後にマルケ王も同様の状況を経験するが（次項参照）、彼らの個人的な証言だけでは恋人たちの秘められた恋を公然と断罪するには至らない。むしろ性急に（証拠を提示することなしに）事実を暴露することは「まったくの卑劣な行為（*die grôzen unhöfscheit*）」（v. 13610）と認識されているのである。つまり恋人たちの不実を証明し、正しい裁きが行われるためには第三者がその事実を「共有」しなければならないのである。いかに王たる者と言えども、このプロセス ― 本稿ではこれを「裁定のプロセス」と名付ける ― なしに裁定を下すことはできない。だからこそこの客観性を確保するために廷臣たちが協同して罠を張り巡らすのである。

マリョドー、メロート、マルケ、この三人の謀りごとは、トリスタンとイゾルデ、そしてブランゲーネの知恵によってことごとくかわされていく。彼らはこの「裁定のプロセス」を履行することが出来ない。そして、計略を仕掛ける三人の間にも不協和音が生じ、ついにマルケ王は信頼のおける宮廷貴族たちを招集するに至る（vv. 15267-99）。かくしてトリスタンとイゾルデの恋を暴くこと

は、私秘的な領域に限られたものから、本格的に国家的事案へと転換し、ロンドンでの公会議を経て、神明裁判が開かれることになる。神明裁判においてもイゾルデは策略によって自身の潔白を証明するのであるが（vv. 15550-764）、この時点でトリスタンとイゾルデの恋の疑惑が「世間に」広く知れ渡り、それに伴い「裁定のプロセス」がマリョドーらの手から宮廷全体へと移るのとは対照的に、マリョドーとメロートの嫉妬心、憎しみという個人的感情は（前半部と同じように）集団的意識の中に霧散する。

このように、トリスタンとイゾルデの恋が疑惑として公衆の目に曝されるまでには、宮廷外からの闖入者、そして宮廷内部の横恋慕というマルケ王以外の人物によって波乱が引き起こされ、その都度マルケ王自身が当事者として関わらされることで、一足飛びにではなく、段階を経ながらトリスタンとイゾルデの恋においてマルケ王が「恋敵」[26]として介入してくる構図が浮かび上がってくるのである。

2-3. 迷走するマルケ王の猜疑心

マリョドーによる最初の告発から、神明裁判を経て、マルケ王による恋人たちの追放、そして恋人たちが（愛の洞窟から）宮廷に復帰するまでの間、マルケ王はひとつの心情を軸に揺れ動いている。その心情とは恋人たち（特にイゾルデ）に対する猜疑心である。猜疑心ゆえにマルケ王は恋人たちに罠を仕掛けるのだが、それによってマルケ王が知ろうとした真実は彼らの潔白であり、イゾルデの無実である。しかしゴットフリートは、「恋が疑惑を生むということは誰にもどうしようもないこと」、「恋に疑いは付き物」と、恋と疑念の相互性をある程度一般化しながらも、マルケ王の猜疑心を「ばかげた習慣」（vv. 13843）として否定的に扱っている：

> この世の至るところでよく見られるものではあるが、恋に疑いを差し挟むことは、まったく無分別な考えであり、いかにも愚かなことである。なぜなら、疑いを抱かねばならないような恋人のことを、誰も心から愛すことなどできはしないからである。しかし、それ以上の大きな誤ちは、疑いと迷いを晴らそうとすることである。確かな確信を追い求めて絶えず骨を折った末に、もし疑惑を確かめることに成功したとしたら、そのことが他の何ものよりもひどい心痛となる。　（vv. 13791-805）※傍点筆者

このようなマルケ王の猜疑心、あるいは「意識的な自己欺瞞」[27]と言っても過言ではない心の迷走は続き、それは神明裁判以降の場面にも見られる。神明裁判によってイゾルデの潔癖が証明されたにもかかわらず、すぐさま猜疑心が再びマルケ王の内によみがえってくる[28]。そして今度は彼一人がこの「理性を失わせる苦しみ」（v. 16535）にとらわれ、廷臣たちの前で二人の追放を言い渡す：

> われわれ三人が一緒にいることはもはやかなわぬ。どうにかしてそなたたちから離れることが

できるなら、そなた達二人をそのままに、わたしは一人で去ろう。このように一緒にいることはよくない。この結びつきを解消しよう。仮にも王たる者がそれと知りながら、愛を共有するなどというのは、王の身分にふさわしくない。（vv. 16607-16）

この追放は、マルケ王にとって再び自身に懊悩を引き起こすだけでなく、公人としても明らかな失策である。神明裁判でイゾルデの潔癖が証明されているにもかかわらず、そして確たる証拠をつかめていない状況証拠だけでの追放は、宮廷における「裁定のプロセス」から逸脱している。このことを象徴するかのように、マルケ王は「名誉と財産などどうでもよくなってしまい」（v. 17282）、狩りに明け暮れるという為政者として不適当な日常を過ごすことになる。公の承認なしの裁定、むしろ公の承認に反する行為は、結局私人としても内心にわだかまりを残すことになる。

そんな折、彼は偶然トリスタンとイゾルデが身を寄せている愛の洞窟を発見する。マルケの狩猟団が付近にいることを予感したトリスタンは、寝台の上に抜き身の剣を置き、イゾルデと身を離して横になっていた。その場面をマルケは目撃し、今度は彼ら二人が恋仲ではないかもしれないとの疑念を持つようになり、疑いと確信との間で揺れ動く「途方に暮れた男」（v. 17533）と化す。

一度は身を引くことを決意したにも関わらず、この決心を覆したもの、そしてマルケにとっては希望の光とも言える疑念を呼び覚ましたのは、イゾルデの美しさ、その美しき妻を（再び）所有したいという欲望であり（vv. 17532-607）、この心変わりをゴットフリートは痛烈に批判している（vv. 17723-17815）。総じて物語後半部におけるマルケ王のイゾルデに対する（愛情への）執着・欲望は、猜疑心についての付論を含め、トリスタンとイゾルデの「恋心」と対比的に扱われていることからも、明らかに否定的に捉えられる。

かくして恋人たちは再び監視下に置かれることになる[29]。そして、ついにマルケ王は、二人が抱き合って眠っている逢引現場を目撃する。しかし彼は（やはりここでもその場で決着をつけるという「行為をせずに」）証人を連れてくるために一旦その場を立ち去る。マルケ王のこの「回避」行為が、いわば彼自身を袋小路へと迷い込ませる。というのも、逢引現場に大勢の顧問官を連れてマルケ王は戻ってくるが、そこにはイゾルデひとりが残っているだけであり、トリスタンの姿はもうなかったことから、逆にマルケ王は廷臣たちから「イゾルデに対する不当な嘲弄だ」と責められるのである（vv. 18378-400）。マルケ王は「裁定のプロセス」を履行しようとしたのだが、そのために確たる証拠をみすみす取り逃がしてしまい、廷臣たちには「復讐することなしに、怒りを抑えて立ち去る」よう勧告され、結果その通しにしかできなかったのである（vv.18401ff.）。

このような「行為しない人物」としての特徴が、結局は私人として復讐の機会を逸しただけでなく、公人として裁定を下す機会をも逸してしまう原因となったのである。そして愛すべき甥であり、復讐の対象でもあるトリスタンを（愛憎どちらも完遂することなく）完全に失ったこの場面以降、マルケ王はもはや表舞台に登場することはない[30]。このような唐突とも思えるマルケ王の退場は、リヴァリーンとブランシェフルールの出奔の際と同様のものとも言える。ここでマルケ王は、猜疑

心に囚われた人物として役目を終えると同時に、この物語においてマルケの宮廷もまたはるか遠景に退く。

3. マルケ王の宮廷の存在意味

3-1. マルケ王とアーサー王の比較

以上のように、マルケ王は「行為しない為政者」そして「嫉妬に右往左往する夫」という否定的な印象を拭えない。このような君主像は、同時代のアーサー王物語群におけるアーサーその人の人物像と驚くほどの類似性を見ることが出来る。本稿でアーサー王のイメージについて言及する際、ゴットフリートが『トリスタン』を執筆していた12世紀末から13世紀初頭にかけての文学界、つまりクレチアン・ド・トロワの著作物およびハルトマン・フォン・アウエの『エーレク』および『イーヴェイン』に拠るところが大きい。さらにはゴットフリートの論客であったヴォルフラムの『パルチヴァール』におけるアーサー像も大いに参考にしている。

アーサーは自ら名誉を獲得する冒険を何一つ実行することはないが、彼の宮廷は「名誉の象徴」として扱われている。先述の詩人たちが描く主人公たちは、冒険によって獲得した名誉を「確認する」あるいは「承認してもらう」ためにアーサー王の宮廷に立ち寄るのである。このようなアーサー王の不動性と主人公たちの動性との関係性は、そのままマルケ王とトリスタンの関係性と一致する。トリスタンは幾度となくマルケ王の宮廷と「外の世界」を行き来する。対するマルケ王は、自身の宮廷から一歩も出ることはない。

また、「トリスタンもの」同様、三角関係を描いたクレチアンの『ランスロ』におけるアーサーの言動は、マルケ王の人物像とかなりの一致を見ることができる。例えば、王妃グニエーブルがメレアガンによって略奪された際、彼らを追跡するのは、アーサー本人ではなく、ゴーヴァンとランスロだけであったこと。そして、ランスロ不在の中、王妃が宮廷に復帰した場面では、以下のように語られる：

> このこと〔ランスロがメレアガンの家臣に幽閉されたこと〕は王〔アーサー〕も不快の意を示し、大いに心を傷めたのであるが、しかし他方では王妃に再び会えたので、心は喜びで満たされていて、その喜びの前にはどんな悲しいことも影が薄れてしまうのであった。王が何よりも心に願っていたものを手に入れた今、ほかのことなどあまり気にもならなかった[31]

クレチアンによるこの描写は、トリスタンがマルケ王の宮廷から逃亡した後、マルケ王が忽然と舞台上から姿を消す様子と一致しないだろうか。唯一『トリスタン』と違うのは、『ランスロ』においてアーサー王はグニエーブルとランスロの仲を追及しないことであるが[32]、それ以外の部分での一致は見逃せないものがある。

3-2. アーサー王の宮廷のとの比較

マルケ王とアーサー王の人物像の一致、しかしそれは人物像としてはネガティヴな側面ばかりである。では、ゴットフリートはマルケ王とアーサー王とを重ね合わせることで、彼らの宮廷の虚飾を暴こうとしたのだろうか。おそらくそうではなく、むしろその反対に、アーサー王の宮廷同様、マルケ王の宮廷の名誉の象徴性を強調しようとしたのではないだろうか。

マルケ王が、愛情に執着する人物として描かれ、それが嫉妬を伴った時、恋する者としても、統治者としても否定的人物へと堕していくことはすでに見てきたとおりである。しかしだからといってマルケ王の宮廷全体が恥辱にまみれ、世間から疎まれるような存在にまでなってしまったわけではないだろう。つまり、マルケ王そしてアーサー王個人に対する評価と、宮廷全体に対する評価は次元の異なる基準によってなされていると考えねばならないだろう。これと同様のことは、宮廷の構成員たちの性質からも窺える。マルケ王の宮廷には、邪な心を持つ廷臣たちが少なからずいる。アイルランドの宮廷しかりであるし、アーサー王の宮廷にもケイエという良くもあり悪くもある何とも評価し難い人物もいる[33]。どの宮廷においても、宮廷人として相応しくない者が含まれていたとしても、そのことによって宮廷全体の価値が減じることはない。さらに言えば、神明裁判によってトリスタンとイゾルデの疑惑が晴れた時、マルケ王の「宮廷は再び名誉に満ち溢れた」だけでなく「かつてこれほどまで二人が賞賛に浴したことはなかった」（vv. 16406f.）ほどであり、疑惑を抱いたマルケ王は世間から糾弾されたかもしれないが、宮廷そのものの価値が損なわれたわけではないのである。

ところで、ゴットフリートが自ら典拠に挙げたトマ版トリスタン物語[34]および同じく 12 世紀後半に書かれたアイルハルト・フォン・オーベルクの『トリストラント』では、主人公〔トリスタン／トリストラント〕がマルケ王の宮廷から逃亡した後、アーサー王の宮廷に滞在するエピソードが描かれている。『トリストラント』では、トリストラントは、森での逃避行エピソード[35]の後に、マルケ王の宮廷へ復帰が叶わなかったが、アーサー王の宮廷に身を寄せ、その間イゾルデとの密会を成功させる[36]。その際のアーサー王と円卓の騎士たちの振る舞いは、明らかにトリストラントの恋愛を援助・助長するものであり、それ故にマルケ王をあざ笑うかのようなものである。その意味において『トリストラント』のアーサー一行は、恋人たちの恋愛を正当化するための文脈におかれている。換言すればアーサーの宮廷がマルケ王の宮廷に優越しているとも言えよう。

他方、ゴットフリート版『トリスタン』にはこのエピソードが採用されていない。当時、アーサー王が絶大な知名度を持っていたこと、なおかつゴットフリートが『トリスタン』執筆した時にはすでに「トリスタン伝説」へアーサー王のモチーフが流入していたことを鑑みれば[37]、ゴットフリートが「意図的に」アーサー王のモチーフを『トリスタン』から排除した、あるいは別の何らかの方法でアーサー・モチーフを暗示していると考えることができる。つまり、敢えてアーサー王とその宮廷を作中に登場させないことで、マルケ王とその宮廷に何らかの特別な意味を付与したのではないかと考えることができるであろう。

もし仮に、絶対的な価値（名誉の象徴性）を誇るアーサー王の宮廷を引き合いに出してマルケ王の宮廷が否定されたとしたら、トリスタンとイゾルデの宮廷人としての根拠をも否定することになりかねない。彼らは超自然的・ユートピア的世界である愛の洞窟の完璧な世界よりもマルケ王の宮廷を選ぶのである。だからこそ『トリスタン』におけるアーサー〔アルトゥース〕への言及が、愛の洞窟賛美の文脈に限定され、しかもアーサー王の宮廷でさえも、このユートピアには比肩しえないという説明的機能として用いられているのである（vv. 16859-65; 16895-901）。

また、『トリスタン』においては宮廷間の優劣は問題とされていない。マルケ王の宮廷とアイルランドの宮廷には遺恨はあったものの、それが両者の優劣の関係を示しているわけではない。

このように見てくると、ゴットフリートは「宮廷」を一種の恒常的な価値判断の場として捉えていたのではないだろうか。例えばアイルランドの宮廷では内膳頭の欺瞞が、切り取られた竜の舌という客観的事物によって暴かれ、マルケ王の宮廷ではトリスタンとイゾルデの恋を暴くため、（目撃証言はあるものの、それを裏付ける）客観的証拠を提出できず、むしろ神明裁判では二人の無実が証明される。しかもそれによって二人はこれまでにない称賛を勝ち得るのであり、その後マルケ王が下した追放処分は独断によるものとならざるを得なかったのである。つまり宮廷は、その構成員の名誉について（「裁定のプロセス」も含めた）判断・評価を下す機能を有しているだけであり、もし宮廷全体の資質を問われるとしたら、その判断・評価が正しく下せているかどうかであろう。

結語

最後に未完の結末部[38]についても言及したいと思う。というのも、先述した『トリストラント』おける結末部で、再びマルケ王が舞台上に登場するからである。『トリストラント』において嫉妬に狂うマルケ王の振る舞いは終始批判的に扱われている点は『トリスタン』と同じだが、『トリストラント』の最終場面においてマルケ王は、二人の恋愛の原因が媚薬にあることを知り、そうして媚薬の力に囚われた（魔術的ではあるものの）純粋な恋愛を賛美するために、彼らの遺体を一つの墓に埋葬する[39]。つまり、彼は、トリスタンとイゾルデの恋を（ここでは個人としてではなく世間の代表として）「承認」する役割を担っているのである。

これはトリスタン・ミンネを肯定的に捉えることが前提とされている。トリスタン・ミンネを否定的な側面、それこそ宮廷秩序を破壊するような狂暴性を含んだ側面から扱う論調は少なくないが、最終場面におけるマルケ王自身による承認のプロセスは、マルケ王の宮廷、すなわち作中に描かれた既存の宮廷秩序に承認されたことを意味している。トリストラントとイゾルデの恋は、マルケ自身にとって不義密通の関係ではあるものの、媚薬の純愛は当のマルケ王によって正当化されているのである。そして、マルケの恥ずべき嫉妬心は、媚薬という事実を知らなかったが故の「誤謬」として理解され、その仮象が取り除かれ、トリストラントとイゾルデの真の恋愛関係を認識し、彼らの純粋な恋愛を称えた時、マルケ王の名誉も快復される。

以上のことからも、ゴットフリートがマルケ王の人物像と彼の宮廷にアーサー王のそれを投影していたとしても何ら不思議ではないだろう。主人公たちが宮廷の名誉に浴してこそ「宮廷文学」たる存在価値があるのであり、そこにこそトリスタンとイゾルデの恋愛を正当なもの（純粋な愛）と見なす根拠があるのではないだろうか。

注

[1] テキストは以下の版を使用した：Gottfried von Straßburg: Tristan. Nach dem Text von Friedrich Ranke neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn. 3. Bde. [Bd. 1: Text. Verse 1-9982; Bd. 2: Text. Verse 9983-19548; Bd. 3: Kommentar] Stuttgart 2006[11].

[2] 拙稿「ゴットフリートの『トリスタン』における策謀の力学（1）―トリスタンのアイデンティティー獲得と宮廷の陰謀―」成蹊大学文学部学会『成蹊大学文学部紀要』第 51 号（2016）、193-214 頁。

[3] ゴットフリートはプロローグ（vv. 1-244）において、トリスタンとイゾルデを「高貴なる恋人たち（*edele senedaere*）」と形容し、彼らの恋が「高貴なる心を持った人々の糧〔心の慰め〕になる」（v. 233）ものと確信している。

[4] 「三人の父」との関係性の再構築については、拙稿（2016）、198-201 頁参照

[5] Vgl. Rainer Gruenter: Der Favorit. Das Motiv der höfischen Intrige in Gotfrids *Tristan und Isold*. In: Euphorion 58 (1964), S. 113-128, hier S. 120.

[6] アイルランド宮廷において得た名声は「騎士トリスタン」としてのものではなく、「楽人タントリス」としてのものである。さらに、タントリス・エピソードにおけるトリスタンの偉業は、コーンウォールの宮廷内だけで通用するいわば「内密の偉業」であり、このことがトリスタンの「対外的な」名声を高める一因とはなり得なかったと言えるだろう。

[7] 拙稿（2016）、204 および 207 頁以下参照。

[8] Horst Wenzel: Öffentlichkeit und Heimlichkeit in Gottfrieds ‚Tristan‘. In: ZfdPh 107 (1988), S. 335-361, hier S. 359. H. Wenzel によれば、トリスタンは明確な自己同一性がない、領地を持たない父なし子であると同時に、次々に変装することで（身分や政治的境界線を超える、さらに強く言えば既成の秩序を無視することで）驚くべき成功を収める人物であり、このような不定形の英雄の存在は、潜在的に政治的秩序を危機に陥れる可能性があると評している。

[9] また、二人が媚薬を飲んでしまったことに気付いたブランゲーネの叫びにも事の重大さがにじみ出ている：*ouwê Tristan unde Îsôt, diz tranc ist iuwer beider tôt!* (vv. 11705f.)

[10] このモチーフは『トリスタン』プロローグにおいて繰り返し述べられている（拙稿「ミンネと宮廷的名誉―ゴットフリートの『トリスタン』におけるリヴァリーンとブランシェフルールの場合について―」成蹊大学大学院文学研究科『成蹊人文研究』第 20 号（2012）、133-151 頁所収、137 頁参照）。

[11] ただし、ここで注意すべきことは、彼らの恋心が、媚薬を契機にしてはいるものの、媚薬服用以前に内面において熟成されていた、という見解を完全に否定できない点である。媚薬の役割については、象徴的意義しか認められないという立場と、実際的強制力を重視する立場とがあり、この点こそが物語全体（トリスタン・ミンネ）のコンセプトと関わりがあることからも、媚薬を容易に外的要因として片づけるわけにはいかないのである。

本稿ではトリスタン・ミンネのコンセプトには深入りしないので、ここでは二つの主張を展開しておくにとどめる。ひとつは、トリスタン・ミンネがいわゆる「宮廷風恋愛」のコンセプトと一致するというものである。「宮廷風恋愛」はミンネを宮廷的徳目の中でも最上のものとする考え方であるが、「宮廷風恋愛」自体が、現実の宮廷社会に対するアンチテーゼとして生じたに違いないという推論を完全には排除できないことから（むしろより高い蓋然性があることから）、この説を採るには細心の注意が必要である。もう一方は、トリス

タン・ミンネを「宮廷風恋愛」の基本コンセプトおよび現実の宮廷社会に対するアンチテーゼとして対置させているという見解である。これは、ゴットフリートが中世的「宮廷」社会という枠組みの中には規定されえない真のミンネを構想している、という考えにも行き着く。いずれの説も、トリスタン・ミンネを「清い恋」と見做すことで、既存の恋愛観や社会体制を批判的に捉えているという点で共通している。

[12] トマ版やアイルハルト版などこの後のエピソードが伝えられている作品では、裏切られていたことが分かった白い手のイゾルデは「黒い帆が見える」と嘘をつき、絶望のあまりトリスタンは息を引き取る。これらのエディションでは、トリスタンへの愛情深さ故にその感情が激しい嫉妬と憎しみに転じ、復讐という行為へとつながる白い手のイゾルデの心理が幾分否定的に描かれている印象を受けるが、彼女についてゴットフリートがどのように描こうとしていたかはやはり想像の域を出ない。

[13] Helmut de Boor: Die höfische Literatur. Vorbereitung, Blüte, Ausklang 1170-1250. Mit einem bibliographischen Anhang von Dieter Haacke. 7. Aufl. (Geschichte der deutschen Literatur von den Anfängen bis zur Gegenwart, 2), München 1966, S. 141; vgl. auch Rosemary Norah Combridge: Das Recht im ‘Tristan’ Gottfrieds von Straßburg. 2., überarbeitete Aufl., Berlin 1964, S. 127 u. 133.

[14] Gisela Holland: Die Hauptgestalten in Gottfrieds Tristan, Wesenzüge, Handlungsfunktion, Motiv der List, Berlin 1966, S. 53-78, bes. S. 61-64.

[15] Vgl. Ina Karg: Die Markefigur im ‚Tristan‘. Versuch über die literaturgeschichtliche Position Gottfrieds von Straßburg. In: ZfdPh 113 (1994), S. 66-87, bes. S.70-76.

[16] Albrecht Classen: König Marke in Gottfrieds von Straßburg Tristan: Versuch einer Apologie. In: ABäG 35 (1992), S. 37-63, hier S. 40 u. 46.

[17] このことはトリスタンの素性を侮辱するモルガーンの台詞からも読みとれる：「しかしながら我々は皆よく知っているぞ、ブランシェフルールがどんなふうにそちの父親と故郷を出奔したか、彼女がどういう名誉を得て、この情事（*vriuntschaft*）がどんな結末になったかを。なにせこの国ではその話で持ちきりだからな。」（vv. 5397-5402. ※傍点筆者）

[18] K. Morsch は、マルケ王の「無反応」を二人の婚姻に対する「暗黙の了解」と見做しているが、この点については議論の余地がある（Vgl. Klaus Morsch: *schoene daz ist hoene*. Studien zum Tristan Gottfrieds von Straßburg, Erlangen 1984, S. 104f.）。

[19] 恋あるいは結婚を拒絶する心理・行為は、フェルデケの『エネアス物語』におけるラウィーニアや『ニーベルンゲンの歌』のクリエムヒルトに代表されるように、女性に特有のものであり、しかもその拒絶の決意は一人の英雄の登場によって必ず覆される。ただし、悲劇的結末にしろ、大団円を迎えるにしろ、後に述べるように、マルケにとってイゾルデは運命の人ではなかったことが、逆に彼の悲劇性ないしは滑稽さを醸し出す要因となっている。

[20] Vgl. Rainer Gruenter: a. a. O., hier S. 116; Rüdiger Krohn: Erotik und Tabu in Gottfrieds ‘Tristan’: König Marke. In: Stauferzeit, Geschichte, Literatur, Kunst. Hg. R. Krohn, B. Thum, P. Wapnewsli, Stuttgart 1978, S. 362-376, S. 376.

[21] さらに後の場面でイゾルデは「彼の喜びの導きの星」（vv. 13656f.）とも形容されている。

[22] 同様の例はギラーン大公の宮廷でトリスタンが子犬プッティクリューを所望する場面にも見られる（vv. 15915-62）。

[23] これと類似の描写はアーサー王にもしばしば見られる：クレチアンの『ランスロ』におけるメレアガンの挑発に対するアーサー王の無反応、『パルチヴァール』におけるクンドリーエの非難に対するアーサー王の沈黙、『イーヴェイン』では、泉の騎士への挑戦において円卓の騎士たちに後れを取っている。アーサー王とマルケ王との比較については本稿 3 節以降参照。

[24] Vgl. vv. 13614ff. また、いわゆる流布本系統に属するベルール版トリスタン物語では、密告者・陰謀者たちはトリスタンに復讐され命を落としている。

[25] Vgl. Horst Wenzel: Öffentlichkeit und Heimlichkeit in Gottfrieds ‚Tristan'. In: ZfdPh 107 (1988), S. 335-361, hier S. 358.

[26] R. Simon はここでのマルケ王を「正当さを失った嫉妬した夫」と評している（Ralf Simon: Thematisches Programm und narrative Muster im Tristan Gottfrieds von Strassburg. In: ZfdPh 109 (1990), S. 354-380, hier S. 360）。Vgl. auch Gisela Holland: Die Hauptgestalten in Gottfrieds Tristan, Wesenzüge, Handlungsfunktion, Motiv der List, Berlin 1966, S. 53-78, bes. S. 61-64.

[27] Albrecht Classen: König Marke in Gottfrieds von Straßburg Tristan: Versuch einer Apologie. In: ABäG 35 (1992), S. 37-63, hier S. 45.

[28] ここでの猜疑心は「畑にまかれた種」に譬えられ、ごくわずかな条件で（人の心の内に）自然と発生するものとして扱われている（vv. 16455-67）。同様の描写は、廷臣たちのトリスタンに対する嫉妬心が芽生える場面にも見られる（vv. 8314-27）。

[29] ゴットフリートは、見張りの有害さを強調することで、イゾルデは不当に扱われ、そのために善良な心が悪の実を結んだとしている。禁じられたばかりに、考えもしないことを行ってしまう、このような性質は女性に生まれつきのものである。当然ここで引き合いに出されるのはエヴァである（vv. 17817-18114）。この箇所は女性擁護と女性批判とが並置されており、ゴットフリートの女性観を探るのに重要な個所ではあるが、本稿では深く立ち入らず、別稿に譲ることとする。

[30] ゴットフリートの『トリスタン』は「白い手のイゾルデ」のエピソード途中（v. 19548）で未完に終わっており、おそらくその後の最終場面で再びマルケ王が登壇するはずであるが、その場面は描かれていない。

[31] クレチアン・ド・トロワ（神沢栄三訳）『ランスロあるいは荷車の騎士』（新倉俊一・神沢栄三・天沢退二郎訳『フランス中世文学集 2　剣と愛と』白水社、1991、7 ～ 140 頁所収）、107 頁。

[32] 『散文ランスロ』（1220 ～ 30 年頃成立）においてはじめて、アーサーは行為する人（嫉妬し、葛藤し、そして戦う人）としてランスロと対決する。

[33] ケイエへの批判的な評価に反対して、ヴォルフラムはそれなりの詩行を割いてケイエを擁護している（『パルチヴァール』296f.）。

[34] Vv. 131-154.

[35] ゴットフリート版では愛の洞窟に相当。

[36] Eilhart von Oberg: Tristrant und Isalde (nach der Heidelberger Handschrift Cod. Pal. Germ. 346). Hrsg. von Danielle Buchinger. Berlin (Weidler) 2004, vv. 5202-5705.

[37] 本来「トリスタン伝説」は「アーサー王伝説」とは関わりのないものだったにもかかわらず、ゴットフリート版以外の複数の作品にアーサー王のエピソードが挿入されている。トリスタン物語の起源や原典研究に関するものとしては、佐藤輝夫『トリスタン伝説』中央公論社、1981 に詳しい。

[38] 注 12 および 30 参照。ゴットフリートは、トリスタン伝承における結末を採用することなく、彼の作品を未完のままとどめている。それが（創作上の）意図的な断筆によるものなのか、（一説には異端審問にかけられ処刑されたというような）生存にかかわる問題によるものなのかはわからない。Gottfried Weber: Gottfried von Straßburg. 5., von Werner Hoffmann bearbeitete Auflage, Stuttgart 1981. S. 1-9, bes. S. 3.

[39] その際、妃の亡骸には薔薇を、トリストラントの亡骸には葡萄の樹を植えさせたという。薔薇と葡萄の樹はともに絡みつくように生い茂り、二度と分かつことができなかった。そしてアイルハルトは「これぞ媚薬の力なりき」（9719 行）と結んでいる。